＜最優秀賞＞ 金澤 久美子

サニー 永遠の仲間たち

「人生は、いつでも、これから」と、観るたびに励ましてくれる。この作品に惹かれる一番の理由だ。韓国映画「サニー 永遠の仲間たち」のことである。

人気の韓流俳優や国民的女優が主演しているわけではない。出演陣は新人の俳優や、どちらかといえば助演が多い実力派の俳優で固められており、出演者の華やかさで注目を集める映画とは言い難い。公開とともにヒットしたのは俳優の知名度に頼らずともストーリーが人を惹きつける、稀有な映画だからだと思う。

主人公は一見、何不自由なく暮らしている裕福な専業主婦ナミ。高校時代の仲良し 7 人グループ「サニー」のリーダー、チュナと 20 数年ぶりに再会するものの、彼女が病に侵され、余命僅かであると知る。「もう一度、あの時の仲間に会いたい」という親友の願いを叶えるために仲間探しに奔走する中で、当時の眩しく輝いていた日々や淡い初恋、胸に抱いた夢、そしてグループがばらばらになってしまう、ある事件が記憶に蘇る。

韓国の作品によくあるお涙頂戴の「不治の病」モノかと思いきや全く違い、寧ろ全体的にカラッと爽快な印象だ。闘病生活を痛々しく描くシーンはほぼ皆無で、病室で仲間達が学生時代に戻っておしゃべりに花を咲かせたり、病人である張本人が昔取った杵柄、と言わんばかりに高校生を相手に大立ち回りを演じたりと、ユーモラスで笑いを誘う場面が続く。そんな良い意味で「らしくない」ところはこの映画の個性でもある。

ただ、一人、二人と仲間が見つかっていく中で、それぞれが思い描いていた未来とはほど遠い人生を歩んでいることがわかり、観る者を切なくする。高校時代の回想シーンが希望に溢れた明るいものであればあるほど、今置かれている状況が暗く、重く圧し掛かってくるのだ。自分の意志や努力だけではどうにもならなかった、本意ではない現在。旧友に知られたくなかった今の自分。私自身、うまくいかない人生に落ち込み、塞ぎ込むことがある。だからこそ物語が進むにつれ、思い通りになる人生なんてどこにもない、と強く共感し、感情移入していく。

まだ無名だったカン・ソラ演じる高校時代のチュナが凛々しく、美しく、圧倒的なカリスマ性を放ち、その魅力が映画を引き立てている。強さと優しさを兼ね備えた理想のリーダー像は大人になっても揺るがず、チュナが遺言として用意していた仲間たちへのハッピーエンドの贈り物に、出来すぎだと心の中で突っ込みながら、深く厚い不変の友情にやっぱり涙する。余韻に浸りながらエンドロールを眺めていると、見覚えのある作風で描かれた絵が次々と映し出され、それはこの物語の続き、サニー達の未来であることに気づく。本編が終わってもこんなに胸打つ、洒落た終わり方をする映画を私は他に知らない。

日常に疲れて現実逃避したい時、清々しい感動を誘うこの名作をぜひお勧めしたい。きっと、「人生は、いつでも、これから」と励ましてくれるはずである。

＜優秀賞＞ 渋谷 祐熙

７番房の奇跡

父とは。自分にとって父の存在とはいかなるものであろうか。

その答えへと導いてくれたのが、韓国映画『７番房の奇跡』だ。この作品は、父と娘のやり取りに焦点を当て、韓国で 1200 万人を動員した名作でもある。

ー1997 年２月。知的障害を持つヨングは６歳の娘イェスンとの２人暮らし。貧しくも楽しく過ごす毎日だったが、ある時ヨングは少女死亡事件に遭遇し、何も知らぬまま殺人罪で逮捕されてしまう。娘と引き離され寂しさを募らせるヨングだったが、同じく７番房に収監されている房長の命を救った礼として、娘に会いたいと請う。密かに父娘は再会を果たすも刑務所課長に発覚し、２人はまた離れ離れに。しかし、課長や囚人はヨングが無実であることを確信し、公判の日を待つことになるー

この作品『７番房の奇跡』は邦題であって、原題は『７番房の贈り物』だ。では、何が贈り物であったのか、私は作品を振り返ることにした。ヨングとイェスンの面会の様子から彼が娘を愛しており、殺人犯には見えないと感じた課長。さらに、イェスンが食を絶ち入院したことを知った課長。そんな課長はある時、ヨングの収監されている７番房に差し入れを届けた。差し入れの箱を開けると、中から出てきたのはイェスンであった。おそらく課長は、２人の固い絆を確認し、娘が父親に会えないことを哀れに思ってイェスンを送り込んだのだろう。

「贈り物」が娘イェスンだと悟った私は、同時に、父子の関係における愛と絆の強さを改めて学んだ。父が子を何よりも愛し、子が父を慕う姿はどこの国であれ普遍的に美しい。私にも父親がいる。我が家はヨングとイェスンほど貧しくはないし、普通に毎日の生活を過ごせている。勿論、作品と違って私は６歳ではないし、女でもない。それだからか、父とのやり取りはなんとなくぎこちないなんてことも日常茶飯事。一緒に何かをする機会も決して多くない。それでも私は、普通に父がいることが喜びであり、そのような幸せな環境に置かれていることに感謝しなければならないと感じた。それは、父親とは自分を誰よりも愛しており、いるだけで心が落ち着き安らぐ存在であることをこの作品を観て知ったからである。

作品中でも、父ヨングと再会した時のイェスンの表情は元気で明るい笑顔を浮かべている。一方、父と最後の別れを描いた場面は、固く結ばれた２人が二度と会えなくなる悲しみがあふれ、感極まるものがある。この作品を観る際には、そんな父子の関係と感情に着目すると、単なる映画鑑賞にとどまらず何か学べるものがあるかもしれない。

私は『７番房の奇跡』という作品が一番好きだ。それは、父の存在がいかなるものかを教えてくれたからである。

＜優秀賞＞ 八尾坂 昭徳

新感染 ファイナル・エクスプレス

「新感染 ファイナル・エクスプレス」はゾンビ映画と大きく括っていたので気味の悪い、視覚的恐怖が多いのかと思っていたが、いい意味で期待を裏切るものだった。アクションシーンもあり、ハラハラしたり、イライラしたり、時に人間愛を垣間見たり、感情は大きく揺さぶられた。
つまりそれは自分が映画の中の世界に入り込み、この非常時の現場にたっていたことを意味する。

「バイオ団地」、「舞い散ってくる灰」「生き返る鹿」これらは音もなく忍び寄るバイオによる負の遺産を仄めかす前兆に過ぎない。

走る状況では逃げ場もほとんどない密室の KTX。その中でゾンビが襲い被害者は倍増してゆき、非感染者集団の居場所が侵食されていく。号車が離れ離れになってしまったとき、ある者たちは立ち上がり、家族、恋人のもとに向かうのである、それも躊躇することなく。家族や恋人に対しての愛情があるから立ち向かう勇気の原動力になっているのだろう。

利己的で狡猾な考えしかしないような主人公も娘を守るにはどうすべきかと考えていく。皮肉にもこんな非常事態に遭遇してはじめて当たり前と思っていることは実は途方もないほどの偶然で起こりうることを知り、真に守るべきもの、命を賭してもいいと思えるものが危険にさらされたとき、一人では無力であることを悟り、他者と団結、協力していくようになるのである。

その後、やっとのことで非感染者のいる号車で移動できたと思いきや感染者と思われ排除されてしまう。この場面では集団心理が見て取れた。移動してきた非感染者たちを受け入れないのだ。イライラするし、怒りの感情さえ沸き上がるのだが、違った見方をすれば今いる場所は安全であるが、自分たちは非力である。ならば受け入れない行動は危険回避のためかもしれないし、ゾンビから襲わる恐怖から逃れるためかもしれない。冷静な判断は下せなくなったのだろうと思う。

終盤、主人公は自分の感染に気がつくと、正気を失ってしまう前に列車から飛び降り命を絶つ。娘の誕生を喜び、慈しんでいた当時を回想しながら。ここに無念や後悔があったのではないか。もっと仕事中心、自分中心だった自分を顧みて娘との時間をとるべきだったのにと。

総じて、この映画を通して見えてくるのは「つながり」だと思う。

本作はスプラッターで視覚的に怖いいわゆるゾンビ映画ではない。きっかけはゾンビだが、その背景には人間愛、集団心理や葛藤がある。ハラハラ場面も、迫力あるシーンも、広大な駅に誰もいない不気味さも緩急があってひきこまれるが、それ以上に視聴後、仕事も大切だが、もっと大事にすべきものがあるだろうと自問自答させてくれた。それは家族や仲間と過ごす時間であり、思い出の記憶を作ることであると感じた。

また、普段の通勤の電車内でもと感染者でなくとも、不審者がいたらと思い辺りを見回している。それほどまでにこの映画の感染力があったということだろうか。

＜奨励賞＞ 石戸橋 恵美

風の丘を越えて／西便制

♪アリアリラン スリスリラン アラリガナンネ エエエ アリラン ンンン アラリガ ナンネ♪

映画の中盤に家族三人が画面の向こうから歌いながら歩いてくる場面があります。血の繋がらない父、娘、息子。この場面のあまりに楽しく幸せな光景は、カメラを全く動かさない長回しの撮影で、里山の風景とともに一枚の美しい絵のようです。たしか韓国文化院の上映会で見たと記憶しているのですが、友人と一緒に「アリアリラン　スリスリラン」と歌いながら帰ったことを思い出します。

今回、沢山の韓国映画の中で『風の丘を越えて／西便制』を選んだ理由は、この映画を通じてパンソリという素晴らしい韓国文化を知ることができたことと、「ハン」が重要なテーマだったことです。

「ハン」は「恨」という漢字で、日本人の感覚では「恨み」という意味にとってしまいがちなのですが、一つの言葉で表現できるものではなく、映画の中でも様々な意味で使われています。 文字通り恨みであったり、心残りであったり、理想であり憧れであったりもするのでしょう。私は１０年以上も韓国語を勉強していますが、韓国語に対して常に越えられないハンを抱えているような気がします。

旅芸人として暮らしているがパンソリに芸術としての誇りと高い理想を持つ父に対して、自分もそうありたいと望み最後まで連れ添う娘と、芸術ではご飯が食べられないと貧しい生活から逃げ出す息子。父が娘ソンファに「お前の歌は美しいだけでハンがない。親に捨てられ目も見えなくなったのに、なぜハンがないのか」と嘆くのですが、また、「ハンを得てそれを乗り越えた後に西便制も東便制も超越したパンソリの世界があるのだ」とも言います。私は、韓国人のハンというものはどうにもできないものだと思っていましたが、この映画を通して「ハンを乗り越える（한을 풀다）」という表現を知りました。

映画の最後に姉と弟はついに再会し、沈清伝を二人で演奏します。途中でこの旅人が弟であると気づいたソンファは見えない目を弟に向け、二人は見つめ合いながら一晩中演奏を続けます。大変切なく、また圧巻のシーンでもあります。

店の主人に「なぜ二人とも姉であり弟であると気づきながら何も言わずに別れたのか」と問われ、ソンファは「ハンに触れたくないから」そして「二人でハンを乗り越えた」と言います。そして、それでもなおパンソリの歌い手としてはまだまだであるとして、新たなハンを得て目標に向かって旅に出ていくのです。父と同じ厳しい芸の道を選んだソンファを心から応援しながら、この感想文の終わりとします。

私も韓国語の勉強を頑張って、いつの日かハンを乗り越えた先の何かが見えることを期待して。

＜奨励賞＞ 細井 摩耶子

猟奇的な彼女

私が映画館で観た、初めての韓国映画「猟奇的な彼女」。

当時、ハリウッドかぶれで韓国の作品に興味を持っていなかった私は、この映画のタイトル、猟奇的という言葉に「怖いサスペンス映画かな？その割には、このポスターの男女二人は仲よさそうだけど」と。なぜこの作品が話題になり、友達からオススメされるのか、疑問に思いながら観に行った覚えがある。

映画は、お酒と女の子が大好きな大学生キョヌが酔っぱらった彼女に出会うことから始まる。その彼女を介抱したことをきっかけに、外見は最高、でも凶暴な性格でわがままな彼女に振り回される。それでも彼女の要求に応えるキョヌ。しかし、そんな凶暴な彼女にも恋人を亡くした辛い過去があり、キョヌと過ごしながらも過去を忘れられずにいる。

そんな中、彼女はお見合いをすることになり、その場に呼び出されたキョヌは、お見合い相手に彼女と付き合う心得を教えて去っていく。改めてキョヌの優しさに触れるも、やはり過去の恋人を忘れることができない彼女は、気持ちを整理するために、２年後に再会しようとタイムカプセルの中に手紙を入れ、木の下に埋めて別れた。

しかし２年後、彼女は現れず、キョヌだけが彼女の手紙を読むことになる。

さらに年月が経ち、彼女はやっとタイムカプセルを埋めた木の下に行くことができ、そこで、当時の木は雷で打たれたが、彼女が困らないようにと同じような木を植えた青年を知ることになる。そして偶然二人は、最終的に運命的な再会を果たした。

私は、キョヌが彼女の取り扱い項目をお見合い相手に話し、いつの間にか彼女の前から去っていた姿に胸を打たれた。彼女の幸せを願い、彼女の一番の理解者のキョヌだからこその行動だったと思う。

２年後、約束通り来なかった彼女に対し、愛想をつかさずに彼女が困らないようにと同じような木を植えたキョヌの優しさ、一途さにますます魅力を感じ、どんなに猟奇的でも本当の自分を理解してくれる存在に出会えた彼女を羨ましく感じた。最後に、誰もが未来はわからないが、努力した人には、運命の偶然を与えてくれるものなのかと感動し、清々しい気持ちでいっぱいになった。

観終わった後、初めての韓国映画に脱帽し、友達がオススメしてきたのも納得。ラブコメディでこんなに感動するものかと、すぐに映画のパンフレットを買いに行った。

そして劇中で見たこともないテーブルで、インスタントラーメンが入った赤い鍋が美味しそうで、あのお店を探しに私は韓国へ旅だった。今でこそ、プデチゲのお店だとわかるが、初めての韓国旅行で真っ先に探しに行った猟奇的彼女のロケ地のプデチゲ屋さん。キョヌが顔を出しに来ないかと、映画の世界に入り込んだようでした。

この「猟奇的な彼女」は、韓国映画の面白さを私に教えてくれて、私の大好きな映画の一つになり、それ以来韓国映画に注目するようになった。

＜奨励賞＞ 休場 公一

ハロー！？ゴースト

映画には、誰にでも勧めたくなる感動の名作だけど、見直したしたくはない映画があります。しかし、この映画は違います。誰にでも勧めたくなるし、何度も見直したくなる映画です。それが、キム・ヨンタク監督が初めてメガホンを握った処女作『ハロー！？ゴースト』(2010 年製作）です。

ストーリーは、一人で生きる事に疲れた青年カン・サンマン（チャ・テヒョン）が、何度も自殺を図るが死にきれず、その原因が自分に憑りついている四人の風変わりなゴーストのせいだとわかり、彼らを成仏させるべく孤軍奮闘し、そのお陰で、すてきなヒロインとも恋にも落ちてしてしまうといったコメディです。

こう書くと、よくあるコメディかと思われがちですが、この映画は違います！なぜなら、ラスト 20 分にどんな感動名作にも劣らない“優しさの感動”が待っているからです。

映画の起点で、看護師のヨンスは『人はショックが大きいと記憶を失うそうです』と、患者のジョンウォンが余命わずかと知ってから『家族の記憶』を失った事を、主人公のサンマンに教えます。この事は、サンマンの『家族の記憶』を呼び覚ます重要な切欠となります。人は、忘れるという才能のおかげで、毎日を前向きに生きていけるのですが、そのお陰で、本当は忘れてたくないものまで忘れてしまっているのかもしれません。

サンマンは、お弁当の“のり巻き”に、ほうれん草ではなくセリが入っている理由をヨンスに尋ねられ、『ハッ』と、セリの入った“のり巻き”を食べさせてくれた母の顔を思い出します。このシーンでのスローモーションは、サンマンの心の鍵を開ける音が聞こえて来たようで忘れられないシーンです。

サンマンは、自分が出て行けと言ったゴーストたちが、恋焦がれた『家族』だったと気づき、一目散に『家族』であるゴーストたちのもとに走り始めます。そして、これまでゴーストたちが伝えたかったことが、サンマンを想う気持ちと一気に結び付き始めるのです。

走る”腕を組み食事の材料を一緒に買いに行く母”を思い出す。

走る”兄と、映画館の前で結んだ約束”を思い出す。

走る”孫の写真が撮りたくて、隣人からカメラを借りる祖父”を思い出す。

走る”新車で海に向かうなか、泳ぎ方を教える約束をする父”を思い出す。

そして『家族の記憶』に蓋をした交通事事故を思い出す。

これで、この物語の全てのパズルが、サンマンと僕たちにはとけるのです。

そして、“忘れてしまいがちだけど、忘れてしまってはいけないもの”、“目に見えないけど見守ってくれているもの”それが、『家族』であり『愛』だと、サンマンと僕たちは、ゴーストたちに教わるのです。

最後に、ゴーストたちと、真の『家族』として再会したサンマンに、母親のゴーストが言った言葉があります。

『ありがとう母に気づいてくれて』、『ありがとう立派になってくれて』

この映画で、僕は、今度は親として、子供に言ってあげたい言葉にも出会えたのです。

＜奨励賞＞ 黒部 真由

ラスト・プリンセス 大韓帝国最後の皇女

この映画を見終えた私の目は涙で充血していた。世界史の教科書のページにあるのは物語ではなく“インク”に過ぎなかったのだと痛感した。教科書には高宗の名前が載っている次の行から韓国併合の話になっている。そして、見開き１ページで終わり、すぐに第一次世界大戦の講義が始まっている。当映画は、その空白の時間を色濃く描いたものである。

華々しい韓国の芸能界に憧れを抱く日本の若者は非常に多い。韓国でも日韓合同アイドルが誕生するなど相互の文化交流は若者を中心に生まれている。けれども僅か１世紀弱遡れば、そこには血だらけの歴史が刻まれており、数多くの平凡な暮らしが世界中から奪われていた。中でも異国の地で強制労働される者たちの悲惨な状況は世界史の図説にも生々しく写真が載っている。しかし、その中に人々の記憶・日本の受験勉強から姿を消したラスト・プリンセスがいた。徳恵翁主である。

今の私と変わらない歳で異国の地である日本に人質としてとられ、そこで不本意な半生を過ごす。周りは常に敵味方の区別のない状況であり、側近を強制送還され、亡命計画も失敗し、唯一の信頼者とも離れ、政略結婚をした未離婚し一人娘を亡くして、孤独なまま独房にも近い病棟で 15 年もの月日を過ごす姿は見るに耐えない。

一般的に映画等で描かれるお姫様はつまらない宮中での生活に飽き、市に出て冒険し、恋に落ちるというものが多い。もちろん、このような映画も大好きだが、この映画で描かれる姫はみすぼらしい姿をしている。けれども、彼女には前者の姫たちとは類を異にする美しさがあった。辛い記憶を捨てず、どんなに苦境に立たされても祖国への帰還を夢に見て、常に自ら行動する女性である。彼女自身はとても反日感情が強い人物として描かれているが、彼女がそのような思いを持つのは日本が日本であるからではなく、日本が異国であるからだと思う。

学校で教わる歴史は勝者中心であり、敗者一人一人にはスポットライトが当たらない。この映画はその日陰をこと細やかに描いている。2020 年、私という一人の女子大学生が韓流文化を好み、日韓双方で好かれる有名人も多くいる今日を彼らはどう見るのだろうか。ここで留意しておきたいことは日本という異国で苦境に立っていた人々は現在も数多くいらっしゃることである。そして、その辛い過去は次世代へと語り継げられていき、彼らの中には「日本が日本であるが故」に嫌悪感を抱く人々がいるだろう。

実際に辛い経験をした当事者でない我々の世代は史実を知らないままに自分の感情で他国に対して侮辱的な行為をとってはいけない。けれどもすぐに根拠の無い個人の評価が全世界中に広まる世の中である。だからこそ、史実を知る為の初めの一歩として歴史映画を見ることを勧める。この映画、「ラスト・プリンセス 大韓帝国最後の皇女」は日韓の歴史の日陰を知るための入り口に最適な映画だと強く思う。そしてここから、日韓の文化交流がより発展することを切に願う。

＜奨励賞＞ 三宅 理沙

国際市場で逢いましょう

これほどまでに深く胸を打ち、涙が出たのはこの映画が初めてだった。

私は、恥ずかしながら朝鮮半島の歴史についてはほとんど知らずに生きてきた。「泣ける」「韓国歴代興行収入 4 位」といった文言につられて本作を見てしまったことは我ながら安易だったと思うし、この映画は背景を学んだ上で腰を据えて見るべきだった。

主人公であるドクスの人生を追うことで、朝鮮半島の現代史、韓国の歩みに端的に触れることができる。大国間に揺らぎながらも独立の道を歩んだ国家とリンクするように、時代に翻弄されながらも力強く生きるドクスの人生史は圧巻である。

物語の舞台である韓国・釜山の活気溢れる陽気な国際市場の起源は、朝鮮戦争時に興南（今の北朝鮮）から逃れてきた人々が生計を立てるために始めた闇市であった。ドクスも父や妹と生き別れになりながらも逃れてきた一人で、別れ際の父からは一家の「家長」の役目を託される。この瞬間にドクスの運命は決定づけられる。この誓いは、人生の選択の節目にドクスの北極星であり続けるのだ。ドクスは自身の夢や目標をとことん犠牲にして、家族の暮らしや国際市場に構える店を守るために有無を言わさず厳しい環境であるドイツの炭鉱やベトナム戦争へと赴く。方々でドクスが事件に巻き込まれるとき、何かを決断するとき、手を 離してしまった妹の存在や、そのせいで自分を含む家族と引き離してしまった父とのエピソードが常に彼の選択に強く投影される。切なさを感じながらも、そうした物語の中での因果の絡み合いの作り込みに見る人は感心してしまうだろう。

映画のクライマックスで妹のマクスンと再会することになるテレビ番組の存在を通して、北朝鮮と韓国は家族レベルで繋がっていたことをよく理解させられた。マクスンはアメリカに渡って元気に暮らしているとわかり、長い旅路がようやく報われたことをドクスは知るのだ。

老人となったドクスはその頑固さで子供や孫たちから煙たがられつつも、一家は穏やかで豊かな暮らしを享受している。ドクスの激動の人生は彼らには想像もつかない。まるで現在の韓国を体現するかのようである。遂には会えなかった父に誓いを果たしたことを語り掛けるが、これはすなわちもう再会できないことを受け入れ、これまで守ってきた再会の約束の地である店を手放す決意へと繋がっていく。

本作は、友人ダルグとの掛け合いに代表されるようなコメディ要素もあり、壮大な家族の絆に何度も涙腺を崩壊させられながらも韓国の歴史を知ることが出来るという唯一無二の作品であるからこそ、私の一番好きな韓国映画である所以なのだ。